

△弱法師▽の変遷

— 現存テキストの問題から —

樹下文隆

△弱法師▽は世阿弥伝書『五音』により、元雅の作、ただし天王寺の縁起を語るクリ・サシ・クセは世阿弥の作と知れる。しかし、元雅がこの天王寺の曲舞を取り入れて一曲を作ったのか、後で世阿弥がそれを補ったのかは解らない。原作の問題を考えるにあたり、現存テキストについて少し整理しておきたい。

△弱法師▽の諸本は、登場人物の違いから三大別できる。つまり俊徳丸・妻・天王寺住侶・通俊の出る正長二年世阿弥自筆本臨模本（宝山寺蔵）、女の出ない室町末期筆無章句本（鴻山文庫蔵）、俊徳丸と通俊だけの現行形諸本である。臨模本と現行形の大きな違いと言えば、臨模本が次第と天王寺僧の名ノリから始まるのに対し、現行形は通俊名ノリに始まり、クセ後に通俊が俊徳丸を我が子と気付く独白の小段がある程度で、詞章としてはそれほど大きな変化はない。次第を持つ無章句本は両者の中間と言えるけれども、通俊は

津国天王寺は貴賤の集まりにて候程に

天王寺に参り尋はやと存候

と、失った子を尋ねに行くと言乗り、天王寺への道行があり、また天王寺の住僧は

二期の彼岸には施行おこなはれ候

と施行の理由を述べる。これは「さる御かたさまより志すことありとて」と通俊を思わせる施行主の存在を示唆する臨模本とも、通俊が追い失った子のためと施行の理由をはっきりと述べる現行形ともかなり異なり、無章句本の作偽的傾向を物語るものといえ、臨模本から現行形への変遷の一直線上に位置している本文とは言えない。

クセ後の通俊の独白については現行形の古写本でも同様ではない。松井家蔵妙庵本や龍谷大学蔵下掛り本・京都大学蔵十番綴本などはこれを記さず、クセの後はいきなりシテが「げにげに日想観の時節なるべし」（妙庵本、ただし前にシカ／＼の注記がある）とやりだす。ここは、臨模本では「ヲカシイ、事アリシカ／＼」と注記があつて、

ツレ」のうのう日想観今なりとて皆人びとの拝み候シテげにもげにも日想観の時節よのうシテさりながら盲目なればそなたとばかり（日本古典文学大系）

と、日想観の掛け合が始まる。おそらくアイが日想観の時節だと触れるのを受けて妻が俊徳丸に呼び掛ける形なのだろう。現行曲では通俊が独白に続いて「やあいかに日想観を拝み候へ」と言うのだけれど、女の消失から現行曲までにはなお変遷があつたらしい。通俊独白のある観世宗家本や京都大学蔵十三冊本にしても、通俊の呼び掛けを記さず、アイが介在した可能性を想像させている。ただし、無章句本では通俊の独白と呼び掛け（通俊か天王寺僧かは不明）が存在するので、臨模本から現行曲への移行には、いろいろなテキストの介在した可能性を想像するに留めたい。

アイのことについて、田口和夫氏は本誌350号に、古い間狂言の資料を紹介され、寛永十六年以前には現行に近い台本で演じられていたことを指摘された（「弱法師のアイ」昭和六十二年七月）。それによれば通俊が我が子と見付けるセリフの後に子のセリフもある中で、田口氏の言われるように日想観を勧めるのはワキなのであろう。ワキが「是成乞食の行衛をわすれ候な」とアイに命ずる演出のあつたことは、片山博通師によれば、昔は盲目

之舞の小書の時「貴賤の人に行き逢ひの」の所でシテと狂言とがぶつかる型があったらしい（『観世』昭和三十八年一月）が、それなどはその名残であろうか。ともかく、通俊の日想観を勧めるセリフが先のように古写本に見られないのは、女の削除の後しばらく上演が途絶えて謡のみで伝承された期間のあったためと思われ、ワキが日想観札押を要求する演出は、復曲にあたって俊徳丸のクルイが物狂の芸として認識された結果、物狂能の類型として付加されたのであろう。

最初に述べたように、天王寺の曲舞は、元雅の取り込みか、世阿弥の後補か、意見の分かれる所である。三宅晶子氏は、出会いと無関係な芸尽くしの構成に、筋書に拘束されない自由さがあると見て、元雅取り入れの可能性を認めておられる（『元雅の物狂能』『国文学研究』66集）。また田口氏は、曲舞の始まりの唐突さ、△隅田川▽にクセのないこと、俊徳丸が外から天王寺へ来る存在であって天王寺の曲舞を謡う立場にないことなどを理由に世阿弥後補説を支持されている（『花をさへ、受くる施行』『第十五回篠山春日能解説図録』、『石の鳥居ここなりや』『能楽タイムズ』42号）。しかし、臨模本全体から曲舞を見れば、誰によって組み込まれたかはともかく、必然的役割を担っていると思われる。

難波の海も彼の岸に至るやみ法なるらん
という次第で始まる臨模本は、父子再会の筋書だけではなく、四天王寺西門石の鳥居という場と、彼岸の中日日想観の日という時とも重大な関心を寄せている。悲嘆の極致に陥ってもなお救われる希望を抱いている俊徳丸にとって、この日この場で芸として天王寺の縁起を語ることが、確かな救いへの方策なのであり、宗教的高揚感を生み出すために必要だったのである。その高揚の果てに、俊徳丸は解脱のごとき境地に狂い、また盲目の現実へと引き戻されるのであろう。△隅田川▽や△朝長▽などで、悲劇の中に生きる人間の、極限状態における心理を描くことを追求した元雅は、△弱法師▽において宗教的興奮による救いの幻想と現実の姿に弄ばれる俊徳丸像を描いたのである。当然、クルイは物狂の演じ物などではなく、俊徳丸の純粋な魂の発現だった。日想観の掛合は、救いの彼方を幻視しようとする俊徳丸と妻との共同作業なのであり、妻の削除は、原作の精神の風化を象徴していると言えよう。

（国文学研究資料館助手）

